
コレクター

小田マキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コレクター

【Nコード】

N 8 4 4 1 P

【作者名】

小田マキ

【あらすじ】

「貴方が気に入りました、私の物になって頂けませんか？」

くろしゅう
九柳侍郎は人間の造形美に魅入られ、コレクションすることに至上の喜びを感じる人体収集家である。これはそんな彼と関わった人間達の話。

ネクロフィリア、カニバリズムと言った嗜好異常者の描写があります（予定）。ご注意下さい。

九柳侍郎と申します。

私は美しいものが好きなのです。

とりわけ人間が好きなのです。

人体ほど美しい形は他にはいないと思いませんか？

髪の毛も、肌も、眼も、鼻も、唇も、指先も、足の裏も、内臓も……頭先从爪先に至るその何もかもが私を魅了してやまないのです。

何です、……優しさ？ 善良さ？ 慎ましさ？

それはもしかや感情と言うもののことですか？

くだらないことをおっしゃる方ですね。

私が言っているのは人体の持つ、その造形美。

心だの、個性だの、そんな目に見えない不確かなものの何が美しいのですか？ 何処が面白いのですか？

そんなもの、集めたところで何の役に立つのです？ 眺めて楽しめますか？

私が欲しいのは人体のパーツなのです。

いえいえ、全部でなくても構いません。

誰しも身体の全てにおいて完璧なパーツをお持ちの方はおられないでしょう？

欲しいのは、その人間のもっとも美しい部位なのです。

髪の毛でも、肌でも、眼でも、唇でも、指先でも、足の裏でも…
…もしくは、内臓でも構いません。

ただ、内臓の場合は超一級品に限りますよ。

他の部位と違って、保存が難しいものですから。

はい？ お前は見返りに何をくれるのかですって？ 何とも強欲な…。

いえいえ、失礼……ただでそれらを愛でようとする私の方が欲深かったですね。

分かりました。

貴方のもっとも美しい部分、頂けるのでしたら望みは何なりと。

富ですか？ 名誉ですか？ それとも、揺るぎない地位が欲しいのですか？

えっ……おやおや、強欲どころか何て無欲なお人だ。

そんな簡単な希望でしたら、いくらでも叶えて差し上げますよ。

嘘を吐くなですって？

嘘なんて吐いていませんよ。

私の手に掛ければ簡単なことです。

だって、私は……。

そこは地図にさえ載っていない寂れた村だった。

村と言っても少し大きめの集落と言ったようなもので、地元民しかない。よそからわざわざ人がやって来るような観光名所はなくあるのは村を取り囲む鬱蒼とした深い山々。至極閉鎖的な場所だった。

神にさえ忘れ去られたようなその村に、外界から一人の男がやって来ることでこの物語は始まる。

男はよそ者ではなく、この村（今では正式な名前を知っている者は誰もおらず、仮にA村と呼ぶことにする）の出身者であった。

辛うじて電気が通っているだけと言う娯楽もないこの土地では、皆が己の食いぶちを得る為だけの痩せた畑を耕し、ただ死に向かって生きている……そんな生活に嫌気が差した男は、二十年前に陰気なこの村を捨てて東京に出て行ったのだ。

A村とは比べようもない大都会での生活は刺激と誘惑に溢れ、男を虜にした。灯りの途絶えない不夜城のような場所・歌舞伎町に生活拠点を置いた男は、煌びやかな生活にすっかり呑みこまれていた……善良ではなかったかも知れないが、それまで罪と呼べるような罪を犯したことのなかった男は、いつしかその世界で生きたいと言う願望のみに取りつかれるようになった。目を刺すようなネオンの下で、男が欲したのは善悪を見極められる判断力ではなかったのだ。

気が付けばチンピラと呼ばれ、ヤクザの手下になり下がっていた。

血も繋がらない兄貴達に、たくさんの仕事を任されるようになった。それは命に関わるような危険な仕事、国家権力に追い回され、薄暗いコンクリートの塀の中に放り込まれたのも一度や二度ではなかった……それすらも、男の生を刺激する発奮材料だった。骨の髄まで善悪を超越した甘い毒に侵されていた。

危険こそが、男にとって生きていくことを実感させる唯一のものだった。

そんな都会の澱みに染まり切った男が、何故再び忌み嫌う故郷に戻って来たのだろうか？

自堕落な生き方を悔いたのか？

もちろん、否……チンピラと呼ばれた男の現在の呼び名は、逃亡者だった。

快楽に貪欲になった男は、いつしか二つの組を股に掛けて仕事をするようになり、それが露呈して裏切り者の烙印を押されたのだ。

刺激的な生活に身を浸していた男だったが、身内からまでその命を狙われるようになり、もう歌舞伎町……そして、東京にはいられなくなった。

着の身着のままで命からがら逃げ出し、それでも組の威信をかけて追手は男を追い続ける。

逃亡に疲れ果てた男の夜の光に鈍った頭が思い出したのは、あの地図にも載っていない故郷…… A村。

それが、男が今この地に立っている顛末だった。

自分が村を後にしてから、そこは何一つ変わっていない。周囲に立ち込める澱んだ空気に吐き気がした……軽犯罪を犯して刑務所に逃げ込むことも考えたが、それも嫌だった。監獄はことと変わらず薄暗く卑屈で、受刑者に組の手の者だっているかも知れない。

「……あんたあ、よそから来なすったかね」

薄ぼんやりとした記憶を頼りに自分が生まれた家を探して村中をうろつく男に、老人が渴いた声を掛けてきた。着流しの、薄汚れた風体をしている。

「……ああ」

一瞬頭を振り掛けたが、思い直して頷く。今の自分は、素性を知られるのは危険だ……さて、どうしたものか。

「こげなトコにい……なあに、しに来なすつた」

渴いた口の中に唾液を広げるように、老人はモゴモゴと言葉を続ける。

鬱陶しいが、狭い村のこと……自分の来訪はきつとすぐに知れ渡る。男は注意深く老人の濁った目を観察しながら、口を開く。

「……知り合いが、この村の出身なんだと聞いた。そいつから、死に際に家族に自分の死を伝えてくれと頼まれた」

急ごしらえで考えたにしては、なかなか上出来な話だと男は安堵した。

「そいつつたあ……誰だあ？」

「……あんた知ってるか、渡村治良とむらじらうって男だ。今年で……生きていたら、三十四になる」

ヒュッ、と老人の喉が鳴る。

「じろ、……じろおがつ……あああああああああつ……！」

老人は少ない頭髪を掻き耄るようにしてその場に蹲り、身も世もない泣き声を上げた。

男……治良はその様相に、眉を顰める。

「知っているのか？」

こんな老人に、心当たりなぞない。

「じろお、なあ……おらが教え子だあ。十四で、こん村あ出てった……こん村、最後の子供やったにい」

老人の言葉に、男はまじまじと涙と鼻水で汚れた顔を見つめた……ぼんやりとした記憶が、徐々に老人を元の姿に戻して行く。

「……あんた、三田先生かい」

この村唯一の中学で、担任だった人間だ。担任と言っても、さきほどこの三田老人が言った通り、治良の学年は治良一人しかおらず、教員も三田一人だった。

「……じろお、……あんたあに、おらがことを……？」

濁った湿り気で覆われ、充血した眼を治良の知り合いを騙る男に注ぎながら、三田老人はボタボタと滴るような声音で言う。彼の警戒心は、ただの一言だけで解けたようだ。

「……ああ、治良の家まで案内してくれるかい？ 三田先生」

彼にしてみれば極力善良に見えるように、ニイと口角を吊り上げて笑ってそう呼び掛ける。

治良にしてみれば、三田老人の存在が心に焼き付いていたと言うほどの強烈な記憶などありはしなかったが、あまりにも人口の少ない村でただ一人の教員ともなれば思い出すことは容易かった……ただ、それだけなのだ。

「……ああ、ああつ！　もおちろんだあ！」

久しぶりの呼称、老いさらばえた我が身を知ると言う男を三田老人は今ではしっかりと信用している。人も娯楽も少ないこの村で、自身にも関わり合いのあるよそからの客人はそれだけで十分に刺激的だったのだろう。

「あんたあ、名前は？」

「……ああ、俺が……」

しかし、次いで問われた言葉に僅かに眉根を上げる……急ごしらえの作り話の出来栄えに安堵していた彼は、まだそこまで考えていなかった。

「……くりゆう、九柳侍郎くわいりゅうだよ」

「はあー……あんたあも、じろおゆーんね」

そいで仲良うなつたんかあ……そう勝手に納得する三田老人に、渡村治良改め九柳侍郎は内心ほっと胸を撫で下ろす。

九柳侍郎。くわいりゅう

咄嗟に口を突いて出た名が、今後の人生を大きく変えることにな
るうとは、今の彼には知りようがなかった。

実家への道すがら、三田老人は相変わらずの辛気臭い口調で、彼が出て行つてからのA村の現状まで……大した起伏もない話を、繰り返し九柳に語つて聞かせた。

死人に口なし、そこに誇張の見える品行方正に歪んだ渡村治良像に突つ込むわけにもいかず、上の空に相槌を返す彼の心は、次第にネオンの光のひしめく頃に引き戻される。

『新宿歌舞伎町にはな、治良……九柳侍郎つて悪魔みたいな野郎がいるんだ』

組に入つたばかりの頃、とりわけ可愛がつてくれた兄貴分が言つていた。

喋りながら喉仏を左手の指先で擦る妙な癖のある兄貴で、そんなもんだから喋っている言葉が随分聞き取り辛かった。ただ、その指先はピアニストのように綺麗だった……本物のピアニストなんざ目にしたことはなかったが、そんなようなことをみんな言っていた。

綺麗な左手が兄貴の自慢で、真夏でも手袋は欠かさない。右手も当然綺麗だったそうだが、自分が組に入つたときにはもう既に肘が

ら先がなかった。少し前にあった別の組との抗争中に、ドスで斬り落とされたんだそうだ。組長を庇った名誉の負傷らしく、そのお陰で若頭補佐になったと言う触れ込みだ。

不便だろうに義手を付けないのは、あんまりにも生身の手が綺麗過ぎたから、幾ら高価な義手を作らせても、どれも気に入らなかったかららしい……左手を大袈裟なくらい大事にしていたのは、多分その所為だろう。

『悪魔も味方に引きいれりゃあ、あんなに心強い野郎はいない。代償さえ差し出せば、見返りはそれ以上だ……治良、お前も面倒なことがあったら、奴を探すんだな』

兄貴は一体何を差し出して、どんな見返りを得たのか？

幾ら訊いても、喉仏を擦りながら薄気味悪く笑うだけ、結局答えはくれなかった。

その後、組を裏切って追われるようになってから、自分も九柳侍郎なる人物を探そうとしなかったわけではない。

けれど、兄貴が教えてくれたのはその名前と歌舞伎町を根城にしていると言う断片的な情報だけ……その兄貴からも命を狙われている自分が、いつまでもそこに居座り続けていられるわけもなく、よ

しんば見つかったとしても、逃亡者である己に差し出せる物があるわけもなく。大体、ただの都市伝説、兄貴のほらかも知れないのだ。

結局、東京を出て、二十年前にも逃げ出したこの地に帰ってきたのだ。

「……こつが、じろおの家よ」

砂利を踏み締める草鞋の音が途絶え、三田老人は振り返って言った。

指差すその先には、漆喰壁の横に長い塀があつた。黒と白が交互に染め抜かれた幕が掛かつており、その向こうには取り囲むように松の木の枝が見えているだけで、中の様子は窺い知れない。

それまですれ違ってきた家々と一線を画した重厚な日本家屋、それをぐるりと一周した四季の全てを取り込んだような広大な日本庭園が、彼の頭の中には塀を透かして映像化されていた……実家の場所さえうる覚えになっても、寂れた村には似つかわしくないその佇まいは、脳裏に焼き付いて消えてはいなかった。

そして、それが渡村治良の実家ではないことくらいは覚えている。

一体、どう言うことだ？

「……ここじゃねえ」

「あんだあ……なあに驚いとるんね、さっき話したがあ。じろおのお母あのお美津さんがよお、じろお出て行った後お、流行り病で逝んだ村長さんの奥さんの、後添いになったがあ。」

じろおの実家は吹かあ飛ぶよおな長屋だきい、美津さんがあ村長さん家に移った後お、解体されたがあよ」

思わず洩れた言葉に、三田老人は呆れたように再度顛末を述べた。

偽名のルーツをなぞっていて聞き漏らしていた事実に関九柳は、ああ、と頷く。

A村の村長は、邑輝晴十郎と言う男だ。

死んだ魚のように赤黒く濁った目に、脂ぎってテラテラと光っていた禿頭、それなのにザックリと開いたシャツの胸元や手の指先まで黒々とした体毛で覆われていた……背の低いずんぐりむっくりとした体型は、まるで出来損ないの木彫りの熊のようだった。

自分は、奴が嫌いだった。

母一人子一人の渡村家に何か理由をつけてはやってきて、後家の母・美津に色目を使っていた。

そして、美津もそんな晴十郎に満更でもなかった。

あんな醜惡な男に嬉々として股を開く母も大嫌いだった。

狭い村中に二人の関係は知れ渡っており、口さがない村人達の陰口に毎日幼い心は晒されていた……刺激のない退屈な村、自己に責任のない蔑み、それが嫌で自分はA村から出て行つたのだ。

「……ははっ……」

「……ああ？　どしたんね、急に……」

九柳が発した短い笑い声に、三田老人は訝るように白眉を顰めた。

「いや……こんな村にでかい屋敷だなんて思ってな……っと」

慌てて取り繕ったつもりが、それもなかなか失礼な口ぶりになつてしまい、九柳は慌てて口許を押さえる。

「……ああ、ええんよ。じろおもそんで出て行つたにい……やけど、神さんの巡り合わせかあ、お母あの葬式の日いに、じろおまで逝んだあ知らせがなあ」

「えっ……？」

しかし、割り切っている三田老人の次なる言葉に、再び彼は驚きの声を発してしまった。三田老人を通り越した視線が捕らえた塀を覆う鯨幕に、今更ながら気付く……上の空にならず、今後の身の振り方にも重要だった話を、もっとしっかりと聞いておくべきだった。

「……あんたあ、大丈夫だかあ？　おらが話、なんも聞いとらんどお」

「……っ、……ここまで遠かったから、疲れてんだよ」

非難めいた視線に、九柳はそれでも毒づくように答える。実際、嘘は吐いていない……命懸けの逃亡生活に、心身ともに疲れ切っていた。折角の格好の潜伏先がなくなってしまった事実、疲れを口に出してしまったことで、身体は更に重たくなつたように感じられた。

自分は一体、何の為にこんな薄汚れた芥溜ふろさしに帰ってきたのだろう。

「……そおかあ、すまんなんだあ。遠いところ、来てくれたになあ……美津さんはおらんどお、村長さんと娘さんはおるきにい。」

義理でも唯一の家族やきい、美津さんのお位牌んも、報告してつかあさい」

三田老人はそう言って、九柳に頭を下げる。命の終焉の近い年寄り特有の仏の心情か、教師になるくらいで本来の性か……薄汚れ、うらぶれた風体ではあったものの、彼は疑うことを知らない甚だ善人のようだった。ここまで案内してくれたのもよそ者への好奇心だけかと思つたが、親切心の方が強そうだ。そう言えば中学担任時代、彼だけは蔑むような目で自分を見ていなかったような気がする。

「……分かつたよ」

薄くなつた旋毛に嘆息を一つ吐き掛けながら、九柳は首肯する。

ただ、それは自分が故郷を捨てる原因になつた母の死に顔見たいわけでも、三田老人の姿に絆されたわけでもなかった。

よくよく思い返してみれば、この村の住人は総じて嗜好きで刺激

に飢えている。外界から来た自分には興味津々だろう……巧くすれば、薄汚い長屋よりもよほど居心地のいい邑輝邸に暫く厄介になれるかも知れない。

それが無理なら、この馬鹿が付くほど人の好過ぎる三田老人にたかれればいい。今も変わっていないければ、独り身でもう年金も貰っているだろう……年寄りの寂しい一人暮らし、食い扶持が一人くらい増えてもそう文句なぞ言うまい。鬱陶しいが、その乾いた愚痴にちよつと付き合つてやるだけで、歓待してくれる筈だ。

「……あのお、もし……家に何か御用でも？」

そんな樂觀的思考に耽つていた九柳の背に、幼いと言つてもいいような女の声が掛けられる。この村に若い女などいる筈がない……訝る思いが随分と九柳の眼光を鋭くしたらしい。振り返つた自分を認めた人物は、小さく息を呑んで立ち竦んだ。

二十歳には満つまい。行つて、せいぜい十七、八だ。

おかっぱの長い黒髪を無造作に垂らした彼女は、大きな円らな瞳を飾る長い睫毛を小刻みに揺らしている。小高くすつきりとした鼻梁、やや小さく引き結ばれた唇はそれでもぽつてりとして赤く濡れ、黒子一つない肌理細やかな白い肌の上で一際鮮やかな艶を放っていた。九柳よりも頭一つ背の低い華奢な身体は喪服と見られる黒い着

物を着ていて、邑輝の家の縁者であることが知れた。

「……………ああ、紅乃^{くれの}ちゃん」

紅乃だと……………？

A村に……………否、東京でも滅多にお目に掛かれないような上玉の娘を食い入るように見つめていた九柳は、三田老人の言葉にその眉を逆立てる。

紅乃と言う名の女には、心当たりがある。

邑輝紅乃、晴十郎が死んだと言う先妻との間に儲けた一人娘だ。

先妻は昔大阪でホステスをしていた女で、けばけばしい顔をしていた。化粧の力を借りてそこそこの美人だった。

ただ、その娘の紅乃はお世辞にも美しい娘とはいえない。残酷なことに、晴十郎にそっくりな面相をしていたのだ。晴十郎を嫌っていた自分は、もちろん彼女も嫌っていた。

その紅乃と目の前の少女は、顔の輪郭からして違う。彼女のえらの張ったゴツゴツとした顔は、この娘の卵形のそれに二倍はあ

った。

「三田先生、あたし……あの、何か？」

不躰な九柳の視線に初心そのものに目を伏せ、頬を薄っすら桜色に染めながら、少女・紅乃は三田老人に救いを求めるように呼び掛けた。

「九柳さん、こん娘がさっき話したあ村長さんの娘さんの紅乃ちゃんよ。」

紅乃ちゃん、こん人あね、じろお兄いの知り合いん人おなんよお……九柳侍郎さん、ゆうんよ」

「お兄様のつ……？」

しかし、三田老人のお互いの紹介を聞くと、彼女は大きな双眸を更に丸く見開いて九柳を見遣った。その吸い込まれそうな瞳に今度は九柳が妙な気恥ずかしさを覚え、その目を逸らしてしまった。

治良を兄と呼んだところを見ると、この娘は晴十郎と美津との間の娘なのだろうか？

当然行き着く結論だったが、九柳にはどうにも腑に落ちなかった。

不器量だとまでは言わないが、自分の母親も決して美人とは言えない。晴十郎が美津に興味を抱いたのも、肉感的なその体躯と床上

手なところだつたと断言出来る。

あの二人の遺伝子が結合し、例え奇跡が起こったとしても、こんな人形のように美しい娘が生まれたとは到底思えなかった。

それに、どうして長女と同じ名前を妹にまで付けたのだろうか？

今の自分は九柳侍郎であり、それらの疑問点を問い質すことは出来ないのだが……。

「あのつ、九柳さん……！」

視線を足元の砂利に落とし、答えの出ない疑問と戦っていた彼の耳に、鈴の音のような少女の呼び掛けが届く。顔を上げると、自分に何かを期待するようなキラキラした双眸とかち合った。

「治良お兄様は元気ですか？　今は何処に？　一体、どんな人？」

そして、押し寄せる疑問に、どうしたものかと眉間に微細な皺を刻む。紅乃がまだ見ぬ兄に対し、過度な親愛の情を抱いているのは明白だ……自堕落な生活を続けて二十年、見慣れない澄み切った少女の双眸は、九柳の心にほんの僅かな後ろめたさを覚えさせた。

「……残念だがあ、紅乃ちゃん……じろお兄いは逝んだんよ。こんなあ、九柳さんはあそんなことお伝えんきたんよあ」

人の好い三田老人は、躊躇する自分の代わりにその事実を話してくれた。

「えっ……」

その言葉を耳にした途端、輝くようだった少女の顔が一変する。

円らな瞳はワナワナと震え、ダムが決壊するように大粒の涙が溢れ出す……あまりにも突然のことに九柳は驚くが、考えてみれば今日は彼女と自分の母親の葬式でもある。もともと深い悲しみを抱えていたところ、兄の知人を名乗る自分が現れて心が慰めを求めて急浮上、そして、間髪置かずにその死を知らされたことで再び絶望の底に叩き落されたと言ったところだろう。

少女にしてみれば、泣くなと言う方が難しい筈だ。

「紅乃ちゃん……辛いんなあ、可哀想になあ……やけど、九柳さん、中あ案内してあんでえ」

ささくれ立った手で彼女の丸い頭を撫でさすりながら、三田老人は己も滴るような涙混じりの声で諭す。それでも暫く俯いたままだった紅乃……さすがに九柳も急かすような声は掛けられなかった。

「……っ、……ごめんなさい、先生……九柳さん」

ごしごしと手で擦り、まだ赤い目を何度か瞬かせて、ようやく顔を上げた少女は、再びまっすぐに九柳を見つめる。

強かに泣いた所為で上気した頬に赤くなった鼻の頭、引き結んでプルプルと震える唇は幼さへの庇護欲の他に、何とも言えない男の欲を駆り立てる。彼女、紅乃には穢れない、天性の色香があった。

半分は血の繋がった妹であると言う意識が、九柳の胸の内の警鐘を鳴らす……この地に来たのは、間違いではなかったかと。

「行きましょう、九柳さん……父を紹介しますね」

しかし、気丈にも笑みを浮かべて己の手をとった少女に、全ての疑問は突然霧が晴れるようにいなくなってしまった。

A村の葬儀は一風変わっている。

村人達が持つ宗教文化の違いと言うよりも、もっと根本的な村全体に根付いている共通認識の所為だ。

いつ頃からそうだったのかは不明だが、A村には寺や神社と言った冠婚葬祭施設がなかった。宗教さえ、あるのかないのか曖昧である……結婚も葬式も、小さな役場が一つあれば事足りるし、過疎が進む寂れた村に、そんな維持費の掛かる施設は要らなかったのだ。

だったら、故人の墓や遺骨はどうするのかと言えば、大抵の家が敷地内の庭に土葬にするのが慣習になっていた。かさ張るから墓石だつて立てない。山から降りてくる野犬、その他の獣に掘り返されないように、遺体を埋めた土の上に大きく育つ苗木を植えるだけだ。大体が実のなる木だ……たわなに実った果実を残された家族がもいで食べることが、故人に対する一番の供養と言われていた。

他所ではよく言われる死後の世界なんてものも、この村にはない。故人は文字通りその遺族の血となり肉となり、永遠に生き続けるのだから……美味しいものを食べば、家族を亡くした悲しみも和らぐだろう、と言うある意味では合理的な考え方に基づいているわけだ。

九柳が子供時分、よく登った柿の木は死んだ隣の家の爺さんの上に生えていたが、村全体がそんな考え方だったから、気味が悪いと思うこともなかったし、実がつけばもいで食べていた。人の死骸は他に勝るものがないぐらいの肥料になるようで、どの木の実もとて甘くて美味かったことを覚えている……物心つく頃には既に実が

つくようになつていた親父の枇杷も、果汁が滴るようです。甘かった。生前は甲斐性なしの親父だったらしいが、唯一感謝出来るところである。

そんなわけだから、東京に出てきて入った組で先代組長の葬式を出したとき、おやつさんの木は何にするんだ、俺は石榴がいい、なんて何の気なしにこぼしたら、兄貴達に一様に怪訝な顔をされてしまった。何処の未開地から出てきやがったんだと呆れ半分に、遺体は火葬場で燃やして骨にするんだと説明されて、随分と驚いた。より一層、A村には帰るまいと思った。

そんな自分が帰ってきた初っ端、母親の葬儀にかち合うなぞ皮肉もいいところである。

三田老人に別れを告げ、異兄妹の紅乃に案内されて入った邑輝邸は閑散としており、葬式自体は既に終わっているようだ。当時、最後の子供だった自分が出ていってからも人口は減り続けているだろうし、村長夫人の葬式と言えど、集まっていとこ十数人だろう……そんなどうでもいいことを頭の片隅で思いながら、目の前を歩く紅乃の後頭部を見つめる。手を伸ばして触れたくなるほどサラサラの黒髪、旋毛まで可愛らしく見えてしまうのは、命懸けの逃亡生活で久しく女にご無沙汰だった所為だろうか。思い返してみれば、二年そこそこ女を抱いていなかった。

まだ若干十七歳だと言う紅乃の清廉な佇まいの中に、どうしようもなく蠱惑的な色香を感じてしまう。ともすれば、母の死を悼む為に纏っている筈の黒衣着物の中の姿態を、その瞳の裏に想像しようとしている。

自分が彼女に抱いているのは、肉親の情に収まらない畜生じみた

ものだ。散々犯罪に手を染めて、道德觀念が希薄になった九柳だったが、幾ら女に飢えていても、半分は血の繋がった妹に手を出すことを躊躇う気持ちは存在した……存在している筈なのに、この右手には、さきほど誘われたときに伸ばされた少女の細い指の感触が絡みついて消えない。

「こちらです」

自分の内心の葛藤なぞ知るよしもない紅乃は、中庭に面した廊下の先の障子の前で止まり、振り返った。邪気のない微笑みなのに、やはり九柳はその熟れた果実のような唇ばかりを眼で追ってしまう。

果実と言えば、彼女もこの村で育ったからには何の疑問も持たずに庭の木の実を食べて育ったのだろうか？

人間の死体を養分にして実った果実は至極瑞々しい。邑輝の家の木は、確か桃だった筈……乙女の臀部のような薄ピンクの果実をぶつくりとした唇が食み、グシュリと溢れ出た果汁が実を掴んだ腕の肘まで伝う……汁を舐めとる彼女の舌使いまで思い描いた自身にハッとして、ようやくその視線を開け放たれた障子の向こうにやった。

「おお、紅乃お……どいたがぁ？」

そして、部屋の中から投げられた野太い声に、九柳の身の内に燦

り掛けた熱は四散した。

村長の邑輝晴十郎は、相変わらず脂ぎった醜惡な男だった。まだ鯨幕の巡らされたただっ広い客間で、上座の分厚い座布団の上に、それこそ熊の置物のように座っている。

寺も神社も墓もないことから、彼の後ろの床とこに掛けられた登り竜の掛け軸の前、本当に木彫りの鮭を加えた熊の置物があつたのは、弔問客の忍耐を試す嫌がらせか、ただの悪趣味か……九柳にものの価値を見定める目があつたなら、その他の調度品や晴十郎が身に付けた着物も一級品であると気付き、少なくとも後者でないことは分かつたのだが。

それでも、一定水準以上の美的感覚は持ち合わせていても、本人の心根が悪趣味であることだけは確かだった。

「お客様です、お父様。九柳侍郎さんっておっしゃって、治良お兄様のお知り合いの方なんですって」

「ああっ……？　じろおやどおっ……！」

しずしずと奥に座る父親のもとへ進み、説明する紅乃と、治良の名に驚いて眼を剥く晴十郎を交互に見遣りながら、本来なら最初に気つくべきだった差異によつやく気付く。

A村特有の言葉の訛り……それが、紅乃には全くなかつたのだ。

異母姉と同じ名であることといい、異父妹には一体どんな秘密が隠されているのだらう……両親のどちらにも全くと言っていいほど似ていない美しい少女、妹ではないと言う可能性だつてあるだらう

し、その可能性の方が遥かに高い。彼女に抱きつつある微妙な感情が、そうであって欲しいと渴望もしている。

疑いが芽生えてしまえば、もう引き戻すことは出来なかった。自分との血の繋がりを否定し尽くす確証が、喉から手が出るほどに欲しい……けれど、薄暗い理由で正体を偽っている我が身に問い質す術はない。

「……そいだかあ、じろおが東京でのお。残念だがあ、ほんにい」

ぐるぐると考えを巡らしている内に、全ての説明は済んだらしい。

湿地帯のような僅かな産毛の残る後頭部に噴き出す汗を、既に湿ったハンカチで拭い拭い、晴十郎は神妙な作り顔で言っていた。ハンカチの下からチラチラと九柳を窺う下目蓋の肉の垂れた目は濁った光を湛え、東京から来た到底真つ当には見えない男の身分を疑っているのは一目瞭然だ。

「あんたあも、どこまで立つとらんでえ入りい……美津、じろおがおかあに、ゆうてえつかあさい」

しかし、そう言つて浅黒い頭皮よりよほどしつかりとした毛に覆われた手で、九柳を手招きする。疑いながらも、珍しい外界からの客人に対する好奇心の方が勝ったようだ……いまだ金よりも物々交

換の横行するA村で詐欺も何もないだろうと言うことは、晴十郎が一番分かってもいることであつたろうし。

九柳は小さく頭を下げ、客間の敷居を跨いだ。

しかしながら、ようやく部屋の中に入った九柳の目は、晴十郎も紅乃も、母の遺体が納められた棺桶でもなく、上座の晴十郎からもつとも離れた部屋の片隅で、何の音も発さず……まるで名匠が作った精巧な人形のように、どこまでも静かに正座している男に注がれていた。

無造作に刈り込まれた短髪に意志の強そうな太い眉毛、切れ上がった鋭い双眸、小高い鼻に引き結ばれた真一文字の口許、余分な肉のそぎ落とされた輪郭は鋭い顎の下に生やした短い無精髭と相俟つて、猛々しい印象を与えていた。そんな精悍な顔立ちをしたその青年は、自分よりも幾分若そうな上に体格も良い……紅乃にも言えることだが、およそこの村には似つかわしくなかった。それは、アスリートのように引き締まった筋肉質の身体を覆う着衣からも言えることだった。

医者なのだろうか？

青年が身に付けているのは、医師が着るような真っ白な白衣だったのだ。葬儀の場に、彼と言う存在はあまりにも不釣り合いだ。

九柳の半ば睨み付けるような強い視線を正面から受け止め、動じた風もなく小さく目礼する男は、やはりその声を発することはなかった。

「あの人は片城先生です……先生って言っても、お医者さんじゃない

いんですけど」

すぐ傍らまできて、紅乃がそう言った。医者ではないと言うなら、あの白衣は一体何なのか？

「片城先生は、亡くなった人のお医者さんなんです。お母様の死化粧をして下さったの……ええと、エンバーマーと言うお仕事なんですって……ね？ 先生」

そう微笑み掛けた紅乃にも、片城と言うらしい男は黙って頷くだけだった。何とも得体が知れない……が。

「……エンバーマー」

口に出して反芻する。

九柳は、一度だけその言葉を聞いたことがあった。

エンバーマー……事故や事件に巻き込まれ、損壊した惨たらしい遺体に外科手術に近い処置を施して、生前の姿に近付ける技士のことをそう呼ぶらしい。それがどんな技術かは知らない。

例の組長の葬儀のときだ……先代の組長は、闇討ちにあって死んだ。顔面が完全に潰されていて、二目と見られないくらいに酷い有様だった。犯人は当時、抗争中だった組の手の者と考えて間違いなかった。葬儀が終わった後、兄貴達とお礼参りに行って完全に潰してやった。

ただ、告別式で棺の中に入っていた組長の顔に、そんな様子は全く見当たらなかった。生前からその面相はお世辞にも男前だとは言

えなかったが、眠っているみたいな、本当に安らかな死に顔だった……どんな魔法を使っただ、と驚いたが、モグリだが驚くほどの腕の立つエンバーマーに依頼して、そこまで綺麗にもらったのだとか。

そう思い出しながらも、納得がいかないことが三つほど浮かんできた。

美津は病死だと三田老人は言っていたが、姿かたちが変わり果ててしまうような酷い病気だったなら、人が好い彼のこと、殊更哀れを誘うように自分に伝えた筈だ。他人には病死と説明しているだけで、本当の死因は別にあるのだろうか？

エンバーマーは技術こそ医者それに近いかも知れないが、あくまでその位置づけは納棺師などと同じで葬儀業者だと聞く……なのに、何故これ見よがしに白衣を着ているのか？

そして、どうして一言も喋らないのか？

それが、A村で生まれながらも、そこを捨て去った自分だからこそ感じる疑問であるような気がしてならない……かつて子供時代を過ごした故郷は、閉塞感のある退屈な村だったが、ここまで薄暗くわけのわからない秘密は抱え込んでいなかった。

何故か全ての疑問の答えがそこに隠れているような気がして、九柳は黙したまま決して語らない男の顔から目を逸らすことが出来なかった。

そんな彼の視線に、片城はやおらその手を持ち上げる。

「なっ……！」

直後、九柳の口から驚きの声が漏れた。

方城は白衣の下に着ていたタートルネックの黒いシャツの首に手を掛け、大きく喉元を肌蹴させる……自分に見せつけるようにしたそこには、喉仏から左の鎖骨に掛けて、刃物で切り付けられたような深い傷跡があった。

「……片城先生ね、昔大きな事故にあつて喉を怪我してから、喋れなくなつたんですって」

致命傷にほど近く見えるその傷のわけを、口をきくことの出来ない彼の代わりに紅乃が説明してくれた。事故に言及した一瞬、今まで決して揺るがなかった片城の鋭い双眸に、ほんの僅かにだけ苦痛のようなものが浮かんだような気がする。

「事情も知らねえで、……」

思わず謝罪を口にし掛けた九柳に、彼は頭を振る。

喋らない理由が分かれば、さきほどまでの不気味さは半減し、強面の外見に特化された不器用な男に見方は変わり始めた。

それでも、まだ疑問は幾つも残っている。

「九柳さん、治良お兄様のことをお母様に教えてあげて」

敷居を跨いだばかりのところについてまでも留まっている彼に、少々痺れを切らしたらしく、紅乃はそう促した。美津に、とは言っているものの、自分が兄のことを聞きたいのだろう。

そうだった、と九柳は当初の目的を思い出す。何も口を挟んではこないが、座布団に座ったままの晴十郎も隙なく己のことを注視している……これ以上余計な時間を掛ければ、疑いは深まるばかりだ。

九柳は部屋の中央に眼を向ける。そこには時代劇に出てくるような桶の形をした棺桶がドンと置かれ、異様な存在感を醸し出していた。母の遺体は座位にされ、その中に納められているのだ。

A村に外界での葬儀の一般常識は当てはまらない。祭壇は設置されず、上座の床の前には喪主が陣取り、故人の遺体を納めた棺桶は部屋の中央に置かれる。遺族、弔問客全員で取り囲んで、酒や件の庭の木の果実を食らう……それがA村で一般的な葬儀だ。夜半を過ぎれば、遺族が棺桶を担いで庭に出て土を掘り、蓋を開けたまま棺桶を穴に納めて、また土を掛け、その上に苗木を植えるわけだ。

よそ者の自分は、当然そのことを知らない。小さく息を呑み、圧倒されたような表情を作り出す。

自分が今なすべきことは、彼らの信用を得る為に巧く立ち回ることだ。

そう頭を切り替えた九柳は、自信なさげな体を装い、ようやく美

津の遺体が納められた棺桶にその歩を進め始めた。

故郷を捨てた男の末路……どんな尾ひれをつければ彼らの同情を誘い、歓待を受けることが出来るだろうか？

頭は不幸な男の生涯の脚本を書き上げる為に、フル回転していた。

午前三時を回った頃、九柳は闇の中で薄っすらと目を開けた。

邑輝邸の用意してくれた客間の寢床に入ってから、まだ一時間も過ぎていない。疲れていないわけではなかった……実際、身体は久々の肉体労働のせいでギシギシと悲鳴を上げていた。母・美津を弔うための最後にして最難関の儀式である遺体の埋葬で、庭の定められた場所に鍬を入れたのは九柳だったからだ。

本来なら近しい人間がするべきことで、最初に鍬を持ち出したのは晴十郎だったのだが、これも治良の最期を看取った自分の責務であり、一宿一飯の礼だ、と申し出たことだった。良心からの言葉ではなかったので、別に断られたっていいと思っていたが、喜色満面で鍬を手渡してきた晴十郎を見ると、その言葉を待っていたようだ。豪勢な夕餉（といっても、葬式飯の残りだった）を振舞ったのは、きつとそういう腹づもりがあつてのことだったのだろう。

邑輝邸の土は粘土を含んでひどく固く、二メートル近い穴を掘るのは大変な重労働だった。その際、片城というエンバーマーもむつとりと手伝ってくれたが、大の大人二人がかりでも穴を掘るだけで二時間近くかかり、さらにその上に桜桃の苗木を植え終わった頃には二時を回っていた。

そんな泥のように疲れているに寝つけないのは、この二年間で染みついてしまった昼夜逆転の逃亡生活のせいだろう。ここ二年余り、明るい昼のうちはカプセルホテルや萎びた安ホテルに息を潜め、暗くなってから行動するという生活サイクルだった。今時分は、九柳にとってもっとも眼の冴える時間帯なのだ。

ここは地図に載っていない村、追手はやって来ない。

散々兄貴たちから田舎者だと馬鹿にされてきた九柳は、頑なに出身地を隠してきた。訛りも苦勞して抜いたし、最初の頃は東北出身者だと思われていたが、否定も肯定もしていなかった。今頃、組の連中は見当違いなところを探し回っていることだろう。ほとぼりが冷めるまで、五年だろうか、十年だろうか……危うい命を繋ぐためにはここに隠れているしか他にしようがない。

部屋の中には、障子越しに月の光が差し込んでいた。スモッグで汚れた東京の灰色の空と違い、故郷の空には月を遮るものは存在しない。目を刺すようなネオンとも違う金色の光は、柔らかく天井の木目を浮かび上がらせている。何年も使われることなく押入れに仕舞いこまれていたらしい布団と、寝巻き代わりの浴衣に染みついた樟脳つうのうの匂い、古い畳のイグサと汗の混ざり合う臭い、自分と同じ夜行性の虫たちの鳴き声に、遠く山々を木霊する野犬の遠吠え……都会の喧騒に比べれば、何のことはない静かな田舎の夜が、九柳の五感をこれでもかと刺激する。

何ともいえない、窒息するような閉塞感。鬱蒼とした山々に囲まれ、外界から切り離された薄暗く寂れた景色、誰も彼もが顔見知りですべてを知られたせこましい掃き溜めのような村が……死ぬほど嫌だと思っていた。忘れていた、忘れ去ろうとしていた陰鬱な幼少期はじわじわと神経を侵食し、体中にまとわりついてくる。ようやく人心地がついたことで、そのことに気付いた。

くっ、と九柳は喉の奥に引っかかったような笑気を吐き出す。

今でもA村は、反吐が出るくらい嫌いだ。いい思い出なぞ何一つ

ない。

けれど、死ぬ「より」も、死ぬ「ほど」の方がいくらかマシなのだ。永遠とも思える私刑の末、五寸刻みにされて魚の餌になる……それが自分も目の当たりにしてきたヤクザの報復なのだから。

カッソッ……

何とか眠りを誘おうと、明るい月の光を避けて寝返りを打った九柳の耳に、金属質な音が届く。

ガッソッ……、ガッソッ……、ガッソッ……

断続的ではなく意思を持ち、半ばリズムカルに続く音に、九柳は閉ざしかけた双眸を見開いた。いまだ掌に残ったジンジンと痺れるような感触が、その音の正体を突き止める。

石を砕き、硬い土壌を掘り返すそれは……鍬の音だ。

思い当たったと同時に、九柳は上半身を起こした。

そして、月明かり差す障子側に視線を送る、無意識に息を殺して黄色い光を受けて障子に像を結ぶ庭の木々は、まるで子供が作った下手糞な影絵のようだった。静かな夜に甚だアンバランスに響く人工的な音に気圧されてか、いつの間にか虫たちも鳴りを潜めていた。

音は続く、それも遠くはない。邑輝の屋敷の敷地内であることに、間違はいなかった。

九柳は四つん這いのように布団から這い出ると、さして遠くない障子に手をかける。指先に緩々と力を込めていき、何の音もさせずに障子を押し開いていった。二、三センチの隙間ができると首を横に傾けて、両の目で辺りを窺う……闇討ち、不意打ちが日常茶飯事だったチンピラ時代の経験に加え、長く身を隠す生活を送るうちに、自然と気配を殺す術は身についている。

歌舞伎町の歓楽街のネオンよりも眩く、澄み切った月光に浮かび上がっているのは、昼間の陽光の下とは姿を変えた景色だった。何でもない庭石や石灯笼まで、夜の影をまえば異様に見える。均等に植えられ、綺麗に刈り込まれた木々の葉は閉じて垂れ下がり、無風状態の中、そよりともしなかった。ただ、それらの幾本かは人の血肉を吸って成長したものだ……薄い視界切れ切れに映り込んだ一本は丁度盛りの頃で、そここの葉影に丸々と盛り上がっているのは、邑輝の血を養分にして実った桃だった。

幼い頃、A村を出るまでは何とも思わずに自らの意思でもぎ、かぶりついていたはずのそれらにプツプツと毛穴が逆立っていくのを感じ、思い知る。

人生の半分以上を外界で生きてきた九柳自身が、もはやここでは異物なのだ。

九柳はきつく両目を閉じた。汗でじつとりと肌に張りついた浴衣を剥がすように、胸で大きく息をする。いつものようにそうやって、体の中を吹き抜ける臆病風が去るのを待った。

ガキじゃねえんだ……胸の中で何度も呟き、そろそろと目を開ける。

「……いつ……！」

しかし、開けた視界に大音量の叫び声を上げそうになった。寸でのところで息を吸い込み、しゃっくりのようなそれで抑えたが、心臓は早鐘のように脈打ち始めていた。

片城っ……？

見覚えのある男の姿が、目の前を横切っていく。

夜遅くまで自分と一緒に美津を埋葬していたのだから、邑輝邸に泊まることになったのは知っている。宿泊施設などないA村、招かれた家に泊まるのは当然のことだ。

自分のように余所から来て、風変わりな葬式に参列した興奮から寝つけずに庭に出たのだろうか？

そんな当たり前の想像は、九柳の頭にまったく浮かんでこなかった。

そんな尋常な姿ではなかった。

背中を丸めて顎を突き出した、まるで猿のような体勢で進む彼は、どうしてだか一切の音を立てない。自分よりも上背があり、ウェイトもあるだろう彼がその足で踏み締めているのは、防犯も兼ねているだろう砂利だ。どれだけ身体を鍛えているようにも、足音一つさせずに砂利の上を歩くことなど不可能だ。

身につけているのは昼間と同じ白衣だというのに、何故か赤黒く染まっていて、白い部分の方が少なかった。硬く握り込まれた拳からは同じ色の液体が滴っている……滴り落ちて、砂利を染める音さえ耳を突かない。まるで無声映画を見ているようだ。あまりの衝撃に、九柳はあの鍬の音が消えていることにも気付けなかった。

どうして、何故が多過ぎて……考えることを完全に放棄していた。ただ、憑かれたように月下に浮かぶ血塗れの人影を見つめる。

異形、そう呼ぶに相応しい姿だった。血の色を映し込んだせいか、月明かりをはね返す眼は赤く輝き、額に張りついた短い髪も、頭からバケツで血を被ったように濡れている。口をきくことができないというハンディキャップのせいか、筋肉質な身体に見合わぬ静かな昼間の印象をかき消す、ギラギラした獣のような双眸……横顔だったはずのその顔は、気が付けば正面を向いていた。

障子を薄っすらと開けた隙間から縦に覗く、間抜けな格好のまま、九柳は完全に固まってしまふ。

敵対する組の事務所を兄貴たちと一緒に襲撃したこともある。人が死ぬ状況に居合わせたことも、一度や二度ではない。その自分が男の一瞥に腹の底から縮み上がる。

殺^やられる。

そう悟った瞬間、片城の視線は逸れた。

何も見なかったというように視線を前に戻し、彼は再び音もなく九柳の視界の中から消えた。

「……な、ン……なんだ、あの野郎っ……」

そのままイグサ臭い畳の上に額から突っ伏し、唾液を欠いた声で吐き出す。心臓はまだ安堵を覚えるには足らなくて、一足飛びに跳ね続けている。

ここに來たのは失策だっただろうか？

そんな考えが頭をかすめるより前に、目の前には深い谷底を覗き込むような闇が広がっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8441p/>

コレクター

2011年9月21日19時03分発行